

「さよなら、まいぶん」をふりかえる

吉田 泰幸

セミナーシリーズ第5回の「さよなら、まいぶん」はダブルミーニングである。ゲストスピーカーのひとり、赤塚次郎氏が開催当時、愛知県埋蔵文化財センターを定年退職するまで、「さよなら」するまであと2ヶ月強であった。そして、赤塚氏自身は行政主体の埋蔵文化財保護の枠組みからも「さよなら」するように自らNPOを立ち上げていた。全国各地にある埋蔵文化財センターは、自前で刊行する雑誌を有していることが多い。それらは研究紀要と名付けられることが多く、大学の学部や研究室などで刊行する学術雑誌と同様のものである。緊急発掘という現場と、研究を発表する場があるというのは、考古学者としてはトレーニングされる機会が多いことも意味していて、埋蔵文化財センター職員（考古学・者：129頁の「考古学者」の註参照）には、自他共に認める考古学研究者（考古・学者：同註参照）であり、岡安氏が発表の中で触れた日本考古学協会の会員も多い。その中でも赤塚氏は「まいぶん」内の紀要のみならず、**全国誌に注目すべき論文**を発表してきており、また本人が言うように「東海地方狗奴国」説を提唱していて、市民向けの講演会も数多くこなしている。ある意味では「まいぶん」のスター研究者であったと言える。第5回はそのような赤塚氏がNPO設立に至った経緯は何か、そしてどうしてそれは、つまりは「さよなら」は必要だったのかということをお赤塚氏と、氏によるご指名の岡安光彦氏がピーター・ドラッカーを参照しながら説くという構成となった。

To climb or not to climb: 登るべきか登らざるべきか

筆者はセミナーシリーズ第5回当日、その開始にあたって、NPO ニワ里ねつが管理している愛知県犬山市青塚古墳について紹介した。青塚古墳は、NPO ニワ里ねつが管理するようになってからは基本的には登頂禁止である。その理由は、今でも古墳は大縣神社の社有地であることと、古墳の主体部は発掘さ

全国誌に注目すべき論文 赤塚 1992、1996 など。古墳時代は前方後円墳体制とも称され、近畿の古墳を中心に議論が展開される傾向にあるが、

個人時代の地域文化の多様性を土器や前方後方墳をとおして議論することに赤塚氏の研究の特徴がある。

れておらず、暴かれていない人の墓として機能しているものだからである。ただし例外的に登ることができる。地元小学生が団体で見学に訪れた時、あるいは筆者のように留学生も含む大学院生を引率して研修の一環として訪問した時、赤塚氏が紹介しているように地域の人々で古墳の清掃、草刈り活動をする時などである。ただし登頂に際しては条件がある。神社の土地、人の墓であることに敬意を払い、古墳に登る前に脱帽、お辞儀をすることである。筆者はこの青塚古墳の事例を2015年12月のTAGに参加した時にも、研究発表の中で紹介している。登れない古墳の典型を陵墓、登れる古墳の典型を史跡整備された古墳とし、史跡整備の中で墳丘の上にあった神社が移動され階段が設置された石川県雨の宮古墳の例、青塚古墳の例など、登る／登らないをキーワードにした日本の古墳のあり方には多様性があることを示した。

青塚古墳の方針は、赤塚氏が紹介するように、地域住民にとっての青塚古墳の存在を知る機会があり、そこに着想を得て、地域にとって大事な古墳にするにはどうしたらいいか、という視点から、いわば赤塚氏が設計したものである。ただし、歴史的経緯などが全く無視されている訳ではない。古墳が築造された時には、その地域の人々にとって一種の聖なる場所であったことは確かであろうし、戦国時代には墳丘が砦として再利用されたこともありながら、神社の土地になり、その後国史跡に指定された。こうした古墳のライフヒストリーを考えれば、あらかじめ古墳はこうであるべきという姿は存在せず、古墳に関わる人々がその都度、その性格を選んできたとも言える。筆者は会の開始に先立つ紹介の中で、青塚古墳の方針を登ってはいけないというタブーを設定することによる「再聖地化」と表現したが、この青塚古墳の例を考古学者、特に埋蔵文化財行政に関わる考古学者に紹介すると眉をひそめる人がいるのも確かである。史跡整備の後に万人に楽しんでもらう、あるいは調査の成果を知ってもらおうという埋蔵文化財保護行政の思想とは逆のベクトルであり、青塚古墳の存在

青塚古墳の事例を2015年12月のTAGに参加した時にも、研究発表の中で紹介している TAG (Theoretical Archaeology Group) 2015は英国・ブラッドフォードで開催された。筆者は一般発表の中で、“To Climb or not to Climb: The Ethics of Burial Mounds as Public History in Japan”と題して発表した。

多く含まれる。
URL: <http://www.kunaicho.go.jp/about/shisetsu/others/ryobo.html> (2017年2月7日にアクセス)
URL: <http://www.kunaicho.go.jp/ryobo/> (2017年2月7日にアクセス)

陵墓 天皇陵124箇所を含めた歴代皇族が埋葬されているとの認識で宮内庁が管理している墓。今日宮内庁が管理する陵墓及び陵墓参考地は900箇所弱あり、古墳時代に築造された古墳も

古墳のライフヒストリー 松田陽氏はパブリック・アーケオロジーの文脈から、兵庫県神戸市に所在する、造営時の古墳の姿が復元された日本国内最初の事例である五色塚古墳のライフヒストリーを詳細に検討している (松田2014)。

は多くの考古学者が公開を求めているが部分的にとどまっている陵墓に原理的には近づいているからでもあろう。青塚古墳は「まいぶん」の中枢部にいた赤塚氏による、「まいぶん」批判を体現するものでもある。

考古学的実践の民主化

NPO ニワ里ねっとの活動は多岐に渡っており、扱う範囲は行政用語で「埋蔵文化財」とカテゴライズされていたものを超えてもいるが、狭義の考古学的実践に関わるものとしては、「遺跡分布調査」と呼ばれる活動を地域住民と、特に年少世代とともに行なっていることは特徴のひとつである。赤塚氏は将来的には発掘調査をするかしないか、発掘調査自体、遺跡の命名など、考古学的実践に関わるプロセス全てを地域住民との協働で行う構想を口にしている。

赤塚氏は「昔はそうだったはず」という発言にあるとおり、手弁当で考古学に取り組んでいた自発的な組織をリバイバルしたという意識が強い。埋蔵文化財行政が整備され、セミナーシリーズ第6回で大塚達朗氏が手厳しく批判したように、そこには山内清男氏の研究の誤解に基づき再生産されているとも言える土器型式編年研究が頭に入っている、小泉翔太氏の言う「技術者」がもっぱら考古学的実践を取り仕切っている状況においては、逆に考古学の市民への解放、民主化をNPOが目指していることになる。その核となる理念は埋蔵文化財行政の理念の一部にも近いはずで、だからこそ筆者が対話の中で紹介したように、周辺の教育委員会や埋蔵文化財センターのスタッフが、NPO ニワ里ねっとの活動にボランティアで関わっているとも言える。

この民主化は古墳の管理体制にも及んでいるが、それが可能になったのは犬山市、あるいは青塚古墳に関わる人々のサイズも大きな要因と思う。それは民主主義が機能するサイズと言うこともできる。青塚古墳と同様のことが、例えば世界遺産を目指すような古墳で可能になるとは思えないからである。意思決定に関わる人々のサイズが大きくなると、合意点を探るのも難しくなることが予想されるからである。

「まいぶん」の危機と Obduracy

「まいぶん」の危機を説明する際には、羽生氏も提示したような緊急発掘の事業量の減少が強調されることが多い。岡安氏の発表はさらに踏み込んで、「まいぶん」の危機をより具体的に可視化するものであった。そしてここでも、これまで何回かキーワードとしてきた Obduracy が問題にされ、危機の源泉とみ

世界遺産を目指すような古墳 大阪府の百舌鳥・古墳群には陵墓とされているものを含む。
古市古墳群が世界遺産登録を目指している。この

なされているように思う。

発掘調査の現場における Obduracy については、岡安氏が巧みに「さよなら型まいぶん」とモデル化している。民間会社に関わるようになってからも基本的にこの構造は変わらないと嘆いていることから、強固な Obduracy と言えるだろう。それに対し、岡安氏は抜本的な改革案を「次世代型まいぶん」として提示した。氏自身も、これは理想形でありすぐに実現可能とも思わないとしているが、興味深いのは、「次世代型まいぶん」モデルは発掘調査から報告書刊行までのプロセスに多様なアクターを呼び込むような設計になっている点である。そのことが、安芸早穂子氏による芸大出身者を含められないか、あるいは岡安氏自身による哲学者に発掘現場の美を言語化してもらおうという発想を生み出している。また、今もすでにそのプロセスにいる多様なアクターを可視化する点も特徴のひとつである。お金の管理や掘るのが上手い人をきちんと位置付けてあげよう、という発言に見られるように、現在では「さよなら型まいぶん」において補助員と一括されている人々の多様性を可視化する形にもなっている。それらは発掘調査の作業工程をセグメント化していくことで導かれるが、この形の場合、「さよなら型まいぶん」の調査員＝考古学者がコントロールする範囲は狭くなる。これへの抵抗が強固な Obduracy、変化しにくさに繋がっている一因かもしれない。

赤塚氏が言うように、NPO ニワ里ねっとに集う周辺市町村の文化財関係の職員は、本当は自らの職場で様々な活動がしたいができない。赤塚氏も愛知県埋蔵文化財センターで同じような経験があるからこそ、より活動しやすい NPO を立ち上げた。ある程度以上の規模の組織は官僚主義的になる。大学も例外ではなく、筆者が対話の中でミッションの話題にかこつけて大学事務システムの批判を展開したりしたのも、ある程度身に覚えがあるからである。ただし、行政組織が扱っている事業はかなり幅が広いので、何か新しいことをやろうとした時に行政組織が手続き上求める前例というのは、探せば類似のものが見つかるもので、労力をかければできないことはないだろう。しかし一般的に手続きの複雑化を進めてそれに組織内の多くの人々が適応している場合には、より多くの労力が必要になり、新しいことをしようとする芽は摘まれがちで、Obduracy は強化されるサイクルになる。

セミナーシリーズ第 1 回で扱った御所野遺跡の土屋根の復元住居、第 2 回の小山・安芸氏の縄文時代の復元画は、それまで強固であった茅葺の復元住居や半裸の原始人としての縄文人イメージという Obduracy の連鎖を断ち切ったものと捉えられる。NPO ニワ里ねっとは埋蔵文化財行政の Obduracy から抜け出すことを志向する人々による運動体と言えそうである。

「まいぶん」と文化財としてのデータ生成

「まいぶん」をめぐる緊張関係は、形を変えながら常に存在しているとも言える。

筆者は学生の時に愛知県埋蔵文化財センターが行う緊急発掘調査に参加したことがあるが、大学の先輩方から聞いたのは、かつては我々の指導教員はそうした行政が行う発掘調査に参加することを許可しなかったということで、大学と「まいぶん」の間に緊張関係があったのは確かである。第6回で大塚氏が1970年代に広大な面積の遺跡が短い期間で発掘され、なくなっていくことへの違和感を持っていたと話したように、考古学的発掘調査がそもそも内在している相反する性格、調査であり遺跡破壊であるという特徴が肥大化したのが緊急発掘調査とも言えること、緊急発掘調査として始まっても結果的に遺跡が史跡公園となる例はあるものの、それは例外的で大部分は原因となる工事の工期が優先され、学術性が犠牲になることが、発掘はすべからず学術的だと学生に教えることが求められる大学の考えと相反することが背景にあるだろう。

近年の緊張関係は、岡安氏が紹介したドラッカーによって提唱され、サッチャリズムに端を発する「民営化」の波と「まいぶん」の関係だろう。民間企業の多くが常に行なっているとされているマネジメントの最適化を「さよなら型まいぶん」に適用すれば、「次世代型まいぶん」になるというのが岡安氏の提案の骨子である。「民営化」は公的分野への市場原理の導入と言い換えることもでき、博物館も例外ではなく、指定管理者制度が一部導入されている。赤塚氏が指摘したように、そうした「民営化」は「リタイアした人に公園管理をやらせる」というような、コストカットの手法としてもっぱら利用される側面もあり、市場原理の導入の功罪については多くの人が自覚的である。

大学を典型とする各所からの学術性の要求と市場原理導入の圧力は、「まいぶん」を防衛的にもするだろう。学術性への対応は、「まいぶん」職員のほとんどが大学で考古学に触れており研究者としての自己を認識している人も多く、また研究紀要などの刊行で、「まいぶん」自体が研究機関としての顔も有することによってなされているように見える。市場原理導入については、各地

行政が行う発掘調査に参加することを許可しなかった 『「考古学エレジー」の唄が聞こえる』（澤宮 2016）では、岡山大学教授の近藤義郎氏も学生が「行政発掘」に参加するのは「御法度」だったことが紹介されている（同：164）。近藤義郎氏は、岡村勝行氏が紹介した1950年代における市民参加の月の輪古墳の発掘調査の中心人物である。

指定管理者制度 公の施設の管理は地方公共団体やその外郭団体に限定されていたが、営利企業や財団法人、NPO法人なども管理を行うことができる制度。2003年に地方自治法の改正により創設された。博物館や美術館では、学芸部門と管理・運営部門のどちらか、あるいは両方に導入されている事例がある。

で岡安氏が所属するような企業が緊急発掘に参入しており、一応達成しているかに見える。しかし、行政が企業を監督するという階層的な構造になっており、この制度上の関係性と、企業側スタッフの方が岡安氏のように各地を転々としていることから、監督する側の行政よりも、監督される側の企業の方が発掘現場の経験が豊富で様々な事態に対処できるという実情とは対応していない。この齟齬から生じる様々な声は、筆者も度々耳にする。ただ、制度上の関係性から、「まいぶん」は緊急発掘に係る考古学的実践のコントロールを維持しようとする。その副産物としてか、あるいはそれ以前からか、赤塚氏によれば各所で「作法」が生じたことが、赤塚氏が目指したデータ標準化の大きな壁になったとしている。このデータの問題を掘り下げてみたい。

対話の中盤で、アートルが赤塚・岡安氏が目指したデータ標準化について、疑問を呈している。NPO で実践しているような多様なアクターを呼び込み、遺跡の多様な利用を推奨することと、データの標準化が結びつかない、データの標準化は多様な解釈に逆行するのではないかと指摘する。それに対して赤塚氏は標準化されるのは最低限の基礎データの部分だけであり、多様な解釈を邪魔するものではないと応えている。赤塚氏がNPO 設立に向かう動機のひとつとして、膨大なデータは誰のためなのか、という思いがあり、標準化とはそれらを効率的に利用可能な状態にする試みであるということと、その試みの頓挫が語られたが、山岡拓也氏からは「何が埋蔵文化財なのか」という問い、掘り出されたものがデータである／ないの境界は何か、との問いが続いた。そちらはアートルの問題意識とはやや性格を異にする。

山岡氏の問いに対しては、赤塚・岡安両氏とも、「何が埋蔵文化財なのか」は各自自治体でガイドラインがあることを強調しつつも、線引きは難しいこと、あくまで埋蔵文化財は行政用語でしかないこと、埋蔵文化財の発掘調査では学術的な判断ができない状況にあるという見解も同時に述べている。山岡氏の問いは学術性と「まいぶん」の緊張関係は依然として継続していることを示している。この関係は何も生み出していないわけではない。遺跡土壌を水洗選別して微細な資料を採取しようという学術上の試みは、それまでに排土として捨てていた土をも資料であるとの認識をもたらしたし、放射性炭素年代測定の測定値についてコンタミネーションの可能性が指摘されると、遺跡から土器が出土したら即座に炭化物サンプルを採取することが試みられたりと、調査工程に影響を与えることもあった。大学教員である山岡氏による学術性の観点からの問い、埋蔵文化財の境界への問いは、そもそもどのようなデータが「まいぶん」の発掘で生成されているのかという問いである。学術的な問いからもたらされる「何がデータか」の枠組みの変化と、データの標準化は両立するのか、というのは、本質的で重要な問いである。これは、赤塚氏の構想のように考古学的

実践のプロセス全てに地域住民と取り組み、発掘調査を共に行うようになった時に、標準化に沿ってデータを採取するのか、あるいは、おそらくは考古学者とは違うモノへの認識を持った地域住民の声もひろいながらデータを生成するのかにも関わる問題だろう。

赤塚氏が問題とする各所の「作法」の差異を超えたところに、「埋蔵文化財という作法」が存在し、それを維持することにデータの標準化が貢献した場合には、緊急発掘に特化した「まいぶん」構造の Obduracy を強化することに繋がってしまうのではないかと、というのがアートルの問いの根幹である。「埋蔵文化財は行政用語に過ぎない」とする赤塚氏が、NPO は「文化遺産」を扱うとして、「まいぶん」の枠組み自体から離れるのは、データ標準化の試みが頓挫した失望があったとしても、そもそもの志向が異なっており、「さよなら」に至るのは必然だったのではないかと思う。

街づくりの持続可能性

赤塚氏もセミナーシリーズ第4回のキーワードの一つである「持続可能性」に言及している。氏の場合は街づくりの持続可能性である。持続可能な街づくりを担う目的で NPO ニワ里ねっとも設立されているが、対話の終盤では資金不足という組織の活動自体の存続に関わる課題が語られた。「補助金・助成金頼み」、「行政の下請け的な部署」、「安いのが当たり前になる」という赤塚氏の発言が、現行制度の課題を象徴している。資金面については、寄附文化の話題にも繋がったが、寄附税制の問題などはセミナー内の対話では深めることはできなかった。また筆者も、この問題に関して現在に至るも情報収集と考察をあまり深められておらず、街づくりに関わる NPO が持続するにあたっての現実的な課題を論じるには力不足である。そのため、ここでも抽象的な議論に終始するが、上記の赤塚氏があげた諸課題は、第3回で取り上げた「公」（おおやけ）の語源に由来する重層構造と、Public Archaeology に「公共考古学」の語があまりあてられない状況、「公共」概念と「官」の重なりが大きい社会背景を想起させる。

赤塚氏が文化遺産での街づくりの持続可能性を説く場合、その内実にさらに踏み込むなら、過去と人々との良好な関係性の持続を意味すると言えるだろうか。すると、何が良好かについて、ここでも価値判断が問題となってくる。基本的には登れない古墳と人々との関係性は、今後どのように評価されるのか、どのような価値ではかられるのか。そのように考えると、岡安氏が示したように「まいぶん」の持続可能性への疑問符が大きい中では、「まいぶん」をめぐる問題も、それへの危機感から生まれた NPO による街づくりの中での過去と人々との関係も、社会科学として考古学の課題と言える。

第5回は埋蔵文化財体制に関する多様な語りを目指したが、それとは趣が異なる第6回でも、「まいぶん」は話題となった。日本考古学を語る上では、避けて通れないテーマであることがセミナーシリーズをとおして改めて浮き彫りになったように思う。